

被爆家族の戦後史—両親と弟のこと

中村 政子（生後5カ月、広島で被爆）
三笠市

私は昭和20（1945）年、広島に落とされた原爆の非人道的な行為、悲惨な状況を語るができない被爆者です。生後5カ月でした。今70歳になりました。

母は近所に住む長崎で被爆された方からお聞きしてはじめて被爆者手帳のことを知ったようでした。母が手帳の交付を受けたのは昭和56（1981）年8月1日ですが、私にはなかなか交付の通知が来ませんでした。母が何回も保健所に出向き、やっと昭和58（1983）年6月14日に交付されました。

母の手帳には、昭和20年8月10日以後広島市より負傷者の輸送があり、被爆された方々を小屋浦海水浴場と国民学校に収容、国防婦人会の要請により負傷者の看護に従事する、とあり、私の手帳には、8月12日私を背負い母の友人の安否を尋ね広島市内八丁堀に入市、と記入があります。父は子どもの結婚に差し支えると言い、最後まで手帳の申請をしませんでした。

子どもの頃から原爆の悲惨な状況を聞かされて育ちました。その日は太陽が朝からカンカンと照るとても暑い日で、外に出ていた母は大きな爆音とともに火柱のような雲が上ったのを見ました。母は火薬庫が爆発したと思い、その衝撃の凄さに驚き、家の中に入ってみると窓ガラスが割れ破片が飛び散っていたそうです。

8月10日から広島市より負傷者の方々が小屋浦海水浴場と国民学校内に次から次へと運ばれてきて、母はその方々の看護に従事するようになりました。その収容所もすぐに満員状態になる程でした。私はその時の惨状を母に話して聞かせてもらっておりました。

母は産婆として働いていたので、どんなに心を痛めながら看護に当たったことかと思います。体中火傷の方々、ガラスの破片が顔、背中、腕



「はだしのゲン祭り」で話す
2014. 8. 3

私が入って母乳が出たこともあり、自分の母乳を飲ませてやろうとしました。ところが、赤ちゃんは口のまわりにガラスでもささったのか深い傷ができており、お乳を吸ってもその傷口からお乳が漏れてしまい、赤ちゃん、お母さん、わが母ともに泣いたそうです。その子のお母さんは胸の皮膚がやけどだれ、とてもわが子にお乳を飲ませせることのできる状態ではなく、その親子は間もなく亡くなられたと話してくれました。

母はいつも話の後には必ず生き地獄だったと何回も口にしました。そしてこれは人類の罪だとも言っていました。

父の仕事の関係で、私が3歳の時に家族は北海道に移住しました。ここから私は弟のことについて書きます。父母が被爆して5年経ってから弟が生まれました。母は1年前に男の子を流産しており、その後生まれた男の子ですから両親はとても喜んでおりましたが、弟は生まれた時から弱く歩くことも困難でした。足首はだらりとし、足の長さは左右生長が違っており、本当ならつま先が前を向き足首も曲るはずですが、前のつま先が逆に後ろを向いて生長するのです。とても歩ける状態ではありません。背骨もS字状に曲がるだけでなく体内の方へねじ曲がり、片肺が完全に潰れてしまっていました。内臓も十分な働きができず、お

にささった人々、そして暑さと満員状態の中、負傷された方々は傷から膿が出て、ハエが傷口に卵を生んで蛆がわき、収容所は臭いと呻き声で一杯だったこと、薬もガーゼもない中、看護の方々が負傷した方々にしてあげられることは蛆をとりヨードチンキを塗ってやることぐらいで、それ以外に手当てのしようがなかった無念さを話してくれました。

毎日何人かの方々が亡くなる様も聞きました。一見どこにも傷のないような方がなぜか翌日には亡くなられていたそうです。また赤ちゃんをかかえたお母さんが運ばれてこられた時、母は乳飲み子の

腹に穴をあけて管を通し、その管から尿を体外の袋へ流すのです(導尿)。毎日の洗浄、2、3日おきの排便が必要でした。

物を持つ力も弱く、座る態勢すら困難でした。車椅子に座る時も添え座布団4枚が必要でした。また寝る時は、背骨の曲がった子どものために少しでも苦しい体を楽にしてやろうと、母は弟の体に合わせて綿花をガーゼで包んだ小さなクッションを作り、それを背中に当てて敷布団に寝せておりました。

このような障がいを持った子が21歳まで生きることができたのは、母の愛と母が看護経験者だったからでしょう。今この文章を書きながら、父母の苦労の様子が走馬灯のように思い出されます。今まで思い出すこともなかった心の奥底の思いが浮かんで筆が止まりそうです。

わが子が被爆による異常児だと分かったのは、母が被爆者手帳を手にした時です。そのことを知った母は泣きました。被爆異常児だと知っていたなら、あのような辛い苦しい治療は受けさせなかったものと!!

遺伝子までも狂わせて、人間として一人で生きていくこともできない弟も亡くなり、よその人に話すこともないと思っておりました。しかし私たち家族が経験してきたことを伝えることが、苦しみにみちた弟の生に報いることだと思ふようになりました。

どのような姿の子でも私たちには掛け替えのない姉弟であり家族なのです。父母、私、妹、弟、下の弟と姉弟4人ですが、家族みんなで弱い子を中心に生きてきました。弟は入退院を繰り返すごとに病名が違いました。小さい頃は小児麻痺、中学卒業の頃には筋委縮症、その次は、どうしても病名が分からないので弟を病院に引きとらせてほしい、一切の面倒は病院でみますからと数回病院関係の方が来られましたが、母は堅くお断りしました。すると最後には遺伝と言葉で片付けられました。

何処へ行くにも背負うか車椅子の弟です。周囲の方たちから私たちはいろいろな心ない中傷を受け悲しく辛い思いもしました。うつるので大勢の中に連れてこられては困ると言われたり、棒でつつかれたこともありました。

父と母も被爆が原因による病に冒されて亡くなりました。被爆が原因の病に一生苦しみ、生き地獄の惨状を心から忘れ去ることができないの

が被爆者です。

異常児として生まれてきたわが子を見守り育てる一日を無事終えることは、命と命の重ね合いでした。家族がどのようにしてその子を見守り続け育ててきたのか、日々の生活に無我夢中で、外に向かって辛いとか苦しいとか声をあげることすら忘れていた家族、生きることに精一杯の生活で周りを見る心に余裕などのない家族でした。生活をしているというより、見つめ合って見つめ合って、共に命を見つめ合って生きてきた家族の時間でした。

その子だけではなく、家族みんなが犠牲者なのです。その子を守り育てるといことはどんなに大変なことなのか。母が過労から倒れ、母が毎日行っていた弟の膀胱の洗浄を私が引き受けるようになり、母の心労がよく分かりました。3週間位で母の意識が戻りましたが、はじめて口にした言葉は、弟の名を呼び、どうしている、でした。母は一生自分を責め続け、家族も一生苛酷な運命を背負うことになるのです。

どうぞ、被爆（被曝）2世、3世の未来の子どもたちの中に異常児が生まれませんようにとひたすら祈ります。